柏崎日報社転載許可済

（1）2022年4月12日（火）柏崎日報　2面　掲載

◆地域に学び地域をおこす－実践活動レポート－「小さな観光」を地域で学ぶ

【新潟産業大学】

地域に学び地域をおこす

――実践活動レポート――

「小さな観光」を地域で学ぶ

観光ビジネス分野（春日ゼミナール）では、地域の持続的な活性化に有効な「小さな観光」をテーマに活動を行っている。

小さな観光とはコミュニティの中で、地域を外に開いて内外の人々にエネルギーチャージの「場」と「機会」を提供し、来訪者も受け入れ側も共に幸せ感が持てる小規模な持続型の観光・交流である。

その特徴は、事業者が自らの考え方・生き方・暮らし方を小さな観光で表現する（＝発信する）ことで「お出（い）でください！」から「行ってみたい！」への本質的な転換にある。

そして、来訪者が「共感」→「リピート」→「ファン」→「コアのファン」→「継続的な支援者・応援者」となるよう来訪者との最初の接点を「フロント」、最終的にここまでお付き合いいただきたいというゴールが「エンド」という考え方だ。

現地調査では、イーリーカフェ（小清水）、貞観園（高柳）、湯元館（北条）、阿部酒造（安田）、ギャラリータンネ（谷根）、キッチン105（横山）に伺うことが出来た。

参加したゼミ生は、各事業体の共通性として、「考え方・生き方が事業のベースにあって個性的な魅力となっていること」や地元との関係性が強いこと。楽しむ発想で、新たな価値を常に積み重ねていること。事業関係者が生き生きとして魅力的なこと等々」をあげた。

最新の観光キーワードは、「来訪者の個人・家族・グループ化」「観光地から地域へ」「地域で暮らす旅」「来訪者のリピート・滞在」と言われている。

先に掲げた事業者は既にこれらを先取りし、コロナ禍で懸命に努力をされており、敬意を申し上げたい。

今後も本ゼミでは、市内の魅力的な「小さな観光」に注目し、地域の持続的な活性化につながる提案に取り組んでいきたい。

経済学部講師・春日俊雄（同大学地域連携センター）

阿部酒造6代目蔵元・阿部祐太氏を訪問

（2）2022年4月16日（土）柏崎日報　2面　掲載

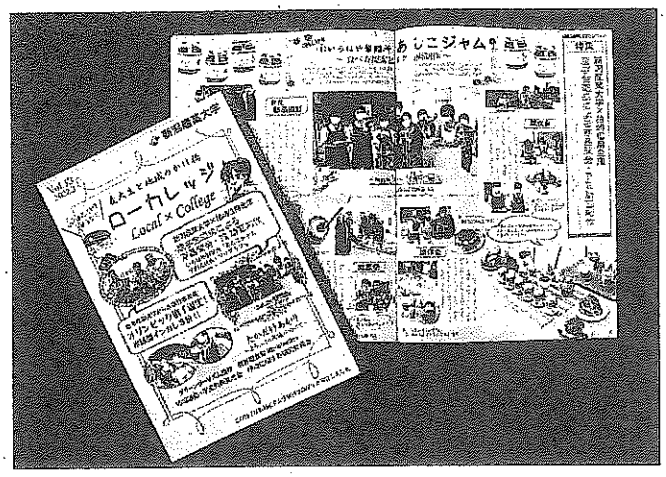
◆産大広報誌「ローカレッジ」企業コラボ特集

産大広報誌「ローカレッジ」企業コラボ特集

新潟産大は地域連携広報誌「ローカレッジ」13号（A4判、16ページ）を発行した。産学金連携によるコラボ商品開発・PR動画、東京五輪水球日本代表の稲葉悠介選手へのインタビューなどの特集がある。

広報誌はローカル（地域）とカレッジ（大学）の造語。学生の製作で2015年に第1号を発行して以来、若者の視点から大学や柏崎地域の魅力を紹介してきた。

今号の産学金特集では、連携協定を結ぶ柏崎信用金庫の課題解決型営業の一環として、同大と地元企業がコラボする様子を収録した。いろはや製餡（あん）所（東本町1）のあんこジャムPR動画、平田表具店（横山）で扱う蒔絵（まきえ）コースターのキャラクター&パッケージデザインを制作した。マリブカフェ（東本町1）ではカレーの新メニュー開発に協力。それぞれの活動を写真とともに紹介している。



新潟産大広報誌「ローカレッジ」13号

（3）2022年4月19日（火）柏崎日報　2面　掲載

◆学生広報に11人を任命

学生広報に11人を任命

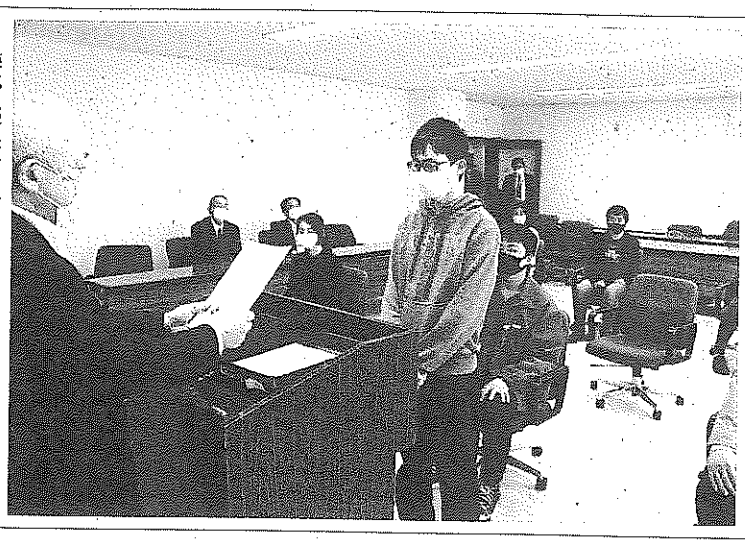
新潟産大

新潟産大（梅比良眞史学長）は15日、学生広報チームの任命式を行った。新メンバー5人を含む2～4年生の男女11人が活動をスタートさせた。

広報チームは、学生目線で大学の魅力を発信していこうと、2020年9月に5人で発足した。21年度も新型コロナウイルスで活動が制限される中、7人がツイッターで大学の魅力を発信した。

この日、梅比良学長は任命証を一人一人に手渡し、「本学の魅力発信は、大学を代表する皆さんの肩に掛かっている」と期待を込めた。

2年生から参加する4年・吉越耀（ひかり）さんは「留学生から初めて参加してもらい、人数が増えて活動の方向性もさらに広がると思う」。新メンバーの3年・田中真由さんは奈良県出身の水球部。「フィールドワークで地域の人との距離が近いのが大学の魅力の一つだと思う。自分自身が発信源となって、私しか知らない魅力を全国にアピールしていきたい」と期待を膨らませた。



梅比良学長から任命証を渡される学生広報チーム

（4）2022年4月22日（金）柏崎日報　1面　掲載

◆「新たな共同体」に学び　産大「東洋史」ユーラシア財団が助成

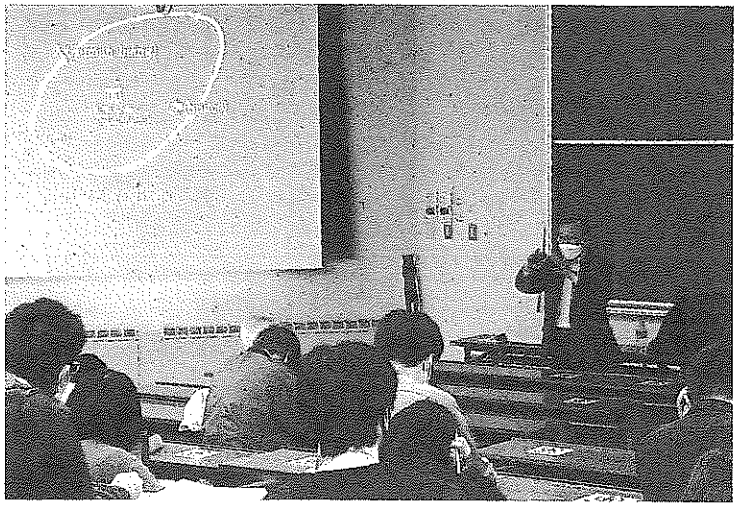
「新たな共同体」に学び

産大「東洋史」ユーラシア財団が助成

新潟産大の春学期科目「東洋史」の特別講座が今月から始まった。一般財団法人ユーラシア財団from Asiaの2022年度助成事業。18日には、同財団の鄭俊坤・主席研究員が講師を務め、新たな共同体を巡り、学びを深めた。

同財団（東京荒川区、佐藤洋治理事長）は世界からあらゆる争いがなくなり、地球上のすべての人々が調和のとれた平和な社会になることに寄与することを目的に2009年設立。現在、助成大学数は国内77を含め57カ国507に上る。

特別講座では、金光林教授をコーディネーターに毎回、国内外から多彩な講師を迎え、東アジアの歴史、文明、自然、環境について幅広く学ぶ。8月1日までの全16回。1～4年生約110人が受講するほか、特別聴講講座として一般にも開放されている。



東洋史で講演するユーラシア財団の鄭俊坤・主席研究員＝新潟産大

18日は鄭さんが「新しい共同体に向かって―その必要性と意味―」をテーマに述べた。「共同体は構成する人々の暗黙の約束の中で生まれたもので永遠ではない。時間、空間、人間によって変わっていく」とし、「共同体の未来を想像して新しい変化を追求していくためには内面的な壁、制度的な壁の二つを乗り越えなければならない。新しい共同体とは国家を否定するものでなく、新しい段階に進むためのもの」と説明。

また「世界のどこかで起きていることは皆さんにつながっている。新型コロナウイルス対策やロシアに侵攻されたウクライナの支援も世界に広がり、新しい共同体の一つ」とした。

文化経済学科3年・池嶋菜央さんは「共同体という言葉をこれまで深く考えていなかった。グローバル化している社会の中でどのように共同体をつくるのかなど、すごくためになる授業だった」と話した。

（5）2022年4月26日（火）柏崎日報　2面　掲載

◆地域に学び地域をおこす－実践活動レポート－

日々の暮らし支えたい～学びを実社会へ～

【新潟産業大学】

地域に学び地域をおこす

――実践活動レポート――

日々の暮らし支えたい

～学びを実社会へ～

小林組（市内上田尻）の正面玄関を入ると間仕切りのない開放感にあふれたフロアがあり、今年3月に本学を卒業した柏崎市出身の力石真碩さんが総務の一員として働いている。入社して2週間が経ち、「一日があっという間に過ぎる」という日々を過ごしている。

大学では、所属するゼミナール（企業経営分野）で多くのフィールドワークとケーススタディを通して、企業経営や地域振興を学んだ。また市役所庁舎の見学やヒアリングの中から地域への理解を深めてきた。

3年になり、多くの学生たちが就職活動に取り組む中で、力石さんは柏崎での就職を明確に決めていた。その理由を「私の住む地域は柏崎でも豪雪地帯ですが、四季折々の美しさと自然の恵みを感じます。除雪や土砂崩れの補修を間近で見ていて、大好きな柏崎を生活インフラの面から支えたいと考えていました」。

また「ゼミで企業経営を学び、業種や経営方針などによって社風も異なることを知りました。弊社を事前に見学し、明るい雰囲気を強く感じたことが入社の決め手でした。今は柏崎を若者が定着する魅力ある街にしたい」と言う。

小林組は、総合建設業を営み、公共工事に加え、民間からも土木、建築、水道工事などを請け負っている。

同社取締役総務部長の西川武さんは「総務の仕事は縁の下の力持ちですが、少しずつ確実に成長して私を超えてほしいです。若い世代が地元に残り支えてくれることは何より励みになります」と大きな期待を寄せる。

小さな蕾（つぼみ）が大きく開花する日は遠くない。

経済学部教授・橋本次郎（同大学就職委員長）